平成19年度第１回中原区区民会議

平成19年度第１回中原区区民会議が開催されました。

会議では議題「地域に参加し、地域に学ぶ～みんなが地域活動に参加しやすくなるヒントを考える～」を中心に、地域で実際に活動されている方の活動の様子をビデオで紹介した後、ビデオで活動が紹介されたゲストを交え、どうすれば地域活動に参加しやすくなるか、参加できるか各委員が活発な議論を行いました。

会議の内容は次のとおりです。

日時・会場など

平成19年７月13日（金）午後２時２分から午後５時４分

中原区役所５階502・503会議室

会議の傍聴人　15人

会議次第

・開会

・会議録確認委員の選任

・議題「地域に参加し、地域に学ぶ」～みんなが地域活動に参加しやすくなるヒントを考える～

ゲスト：黒川登志恵氏（市立井田病院園芸ボランティアセントポーリア班）

本告龍造氏（「とどろき水辺の楽校」写真記録ボランティア）

山本幸彦氏（「老後を良くする会」配食サービスボランティア）

輪島章司氏（「富士通フロンティアーズフラッグフットボール」コーチ）

・中原区協働推進事業について

平成19年度第１回協働推進事業検討部会報告

・閉会

議題検討における主な委員意見

・ビデオ報告を見て、地域で活動する上で参考になるところが何点かあった。

一つは、子どもをきっかけに親を集める手段とか、講習会や勉強会を設けて参加してもらうとか、町内会では役目を作ってあげることで会に入ってもらうとか、具体的にこういうことをやっている、こういうことをやってほしい、とはっきり言うことがポイントではないか。活動を継続させていくという点では、ボランティアならば相手から感謝の気持ちが伝わってくることでまたやろうという気持ちが継続していくとか、自然体でやっていくことが大切とか、飲み仲間をつくるとかがあったかと思う。ま

た、課題として、町内会だと参加してみないと何をやっているかわからない、ボランティアグループだと何をしているかわからない、といったなかなか情報がないことがあるのかなと思う。区民会議も２年目を迎えたので、みんなでこんなことをやっていこうということが意見の中からまとまっていくとよい。

・ただボランティア活動に参加してください、と言ってもだめだと思う。その人その人の持っているスキルを最大限に生かせる場をつくってあげる、その場に合った仕事をしてもらうのが一番だと思う。
ボランティア活動は、全部自分持ちで本当に好きでやってもらうわけなので、自分の納得する活動を自分の思いどおりにやってもらうことが一番である。

・自転車のマナーアップ運動をやっていて、今日子どもから「ご苦労さん」とあいさつをされ、ああ、やってよかったな、これからもずっとやろうと感じた。一声かけるということはすばらしい。地域でやっていることに気軽に参加できる雰囲気づくりは肝心である。

・人間対人間のコミュニケーションを密にし、自分が率先してやっていかないと、なかなか参加してくれない。

・回覧とか掲示板よりも、口コミが一番効果的である。

・小杉２町目では町内会館で大人のおしゃべりを行っている。毎回テーマを決めて、そのテーマについてお互いおしゃべりしている。

・町会も高齢化し、役員のなり手がいない。自分たちで率先して誘っていかないと、なかなか町会の役員にはなっていかない。お祭りとか運動会、盆踊りは、一番コミュニケーションが図れる場である。これらが基本になって、地域に参加することが進んでいくのではないか。

・アメリカンフットボールにもう20年ぐらいお世話になっており、お世話になったスポーツに対して恩返しというか、ぜひそれを広めていきたいという思いからボランティアをやってきた。ワールドカップのボランティアをもしているので、ぜひ大会を成功させたい。15日には日本対アメリカの決勝戦が等々力で行われるので、皆さんにもぜひ来ていただきたい。（輪島氏）

・「老後を良くする会」で、お弁当をつくってお年寄りの家庭に週１回配食している。お弁当を配るというのは、ただつくって配るだけではなく、手渡しをしながら顔色を見て、元気かどうかの見守りも兼ねている。あるお年寄りは足が少し不自由で玄関まで出てこれず、部屋まで上がってお弁当を届けていたが、最近では外に出て花を植えたり草むしったりできるまで元気になった。そういう姿を見ることができるのはすばらしいし、お弁当をつくってくれた人たちにそのことを話すと皆が喜んでくれる。お弁当を楽しみにして、配る時間にわざわざ外まで出ている方もいるし、「おいしいお弁当をありがとう」の一言が、つくっている人たちの励みにもなっている。（山本

氏）

・病院の中に一部屋いただいてセントポーリアの育成をしている。病院内の中でボランティアを受け入れてくれる組織がしっかりしており、困ったことも相談できる。病院や川崎市中原区の方々に支えられての活動で、ほかのボランティアに比べて恵まれていると感じている。こういうボランティア活動もあってもいいのではないかと感じた。（黒川氏）

・町内会では自分が一番若手ではないか。もっと若い人に町内会の活動に入ってほしい。水辺の楽校は幼稚園児や赤ちゃん連れのお父さん、お母さんも参加してくれるすばらしい会である。月に１回から２回のペースで等々力の河川敷で活動をしているので、ぜひボランティアで参加してほしい。（本告氏）

・子どもの生き生きした姿はすばらしい。こういうすばらしいビデオをここの会議だけで見るのではなく、駅前とか屋外で一般の大勢の人が見れるようにすることを提案したい。

・日常、子どもが外遊びをする姿が見えないが、水辺の楽校へ行くと、子どもは自然体で私自身が子どものときにやっていた遊びをそっくり継続してやっている。この活動を広げてほしい。そういった協力をぜひ区にお願いしたい。そういうお金の使い方は有効ではないか。

・昨年の区民会議報告書を運営している学童保育教室の保護者に配布したところ、皆さんが区をよくするために活動していることを知って、すごくうれしかった、ありがたい、といった感謝の言葉と、自分もできることからやってみたいという意見があった。

・「ボランティア活動をしたいが、何かあるか」という問い合わせは、区役所の窓口に結構来るのか。

　→区役所には直接的な問い合わせはないが、市民館とか、そのような活動をしているところには幾つかあると思う。（事務局）

・問い合わせは区役所へ行けばいいだろうというのは多分あると思う。早速そういう窓口やチラシをつくるなり、先ほどのようなビデオを区役所で流してもらいたい。

・区役所のホームページでボランティア一覧表等は閲覧できるのか。

　→今年度の協働推進事業の中で市民活動支援サイトを立ち上げるべく、現在準備を進めているところである。（区長）

・親子でも夫婦でも、家族ぐるみで活動できると仲間ができるのではないか。

・楽しくなければなかなかできないので、やっている方の楽しいという声をウェブとか区役所のホームページに入れて、「若いお父さん求む」みたいな形で声かけに協力いただけるといいと思う。

・日本でのボランティア活動は、仕事を持っていない人が主にやっている。仕事を持

っている人でも参加できる環境を工夫する必要があると思う。

・一人一人が入って自分の居場所がなければ、なかなか参加できない。その人のスキルが行かせるような工夫が必要。また、ただ知るだけでは参加できないので、声をかけられるとか、口コミも必要ではないか。

・独身の人も参加できるような、全ての世代が何らかの形で参加しやすい環境が必要である。

・町内会は、参加しない人から見ると何をやっているのかわからない。こういう活動をしているとか、住民にとってこういうプラスがあるということを積極的に訴えて、全員が参加できるような環境になるとよい。

・青少年指導員の立場から言うと、中高生の居場所がなくなっている。水辺の楽校や富士通のフラッグフットボールに中学生、高校生を取り込んで、子どもたちを健全にはぐくみ、非行のない地域にしていくよう努力していっていただきたい。

・町会の会合になかなかお父さんが出てこないので、町会で今月、母親クラブの協力でパパーズクラブを立ち上げる。入口は広く楽しくということで、親子サマーコンサートや芋堀り、枝豆取りなどを計画している。いずれは参加した方が町会の役員にという心根もある。

・ボランティア的な会について区役所は把握しているのか。

→市民活動支援サイトを立ち上げるために、昨年度から、地域でどのような活動をされているか調査をしている。昨年度は事前準備で約500の団体に声かけをし、半数以上の団体から計画に賛同して回答をいただいている。市民活動支援サイトの計画に際しては、なるべく多くの団体の参加ができるよう区役所からも発信をしていきたい。（事務局）

・スポーツクラブの立ち上げを行政で支援する姿勢はあるか。

→一部、地域スポーツクラブのような形のものが教育委員会の事業としてある。区役所としては今現在そういう取り組みはしていないが、来年度の事業に向け、スポーツ・文化を通した地域活動の活性化ということで取り組みの検討を始めている。（区長）

・川崎はスポーツの振興に力を入れている。教育委員会と区とでお互いに連携してやっていただきたい。

・川崎をアメリカンフットボールの中心にしようということで、全校でフラッグフットボールをやるという話は決まっていると思うが、アメリカンフットボール以外のサッカーとか野球のクラブにも目を配る必要があるのではないか。

・配食のボランティアについて、食事を配ることをなりわいとしている会社があるが、それはどのようにとらえているか。

→中原老後を良くする会のほかにも、ボランティアでお年寄りのところへ配食を

しているさくら会がある。さくら会も配食をしながら見守りを兼ねており、実際にひとり暮らしの方がだれにも見守られずに亡くなられていたという悲しい話もあったと聞いている。（山本氏）

・区民としては、区役所に窓口があり、どこか１カ所に聞けば情報がすべて網羅できるような団体間のネットワークが大切だと思う。広報紙はたくさんの方が見るので、そこでそれぞれの活動を案内して募集をかけていくことも大切だし、区民会議に出ている我々委員も、中原区にどういうボランティア団体があって、どういう活動をしているかという情報を持っていると、問題点の解決にもつながる。そのネットワークづくりが大切である。

・委員は、ここで得たいろいろな知識を町会などあらゆるところで広める責任があり、みなさんに理解してもらえるよう話していただきたい。

・組合の代表として出席しているが、企業に勤めている人は忙しく、なかなか参加できない状況にあるのではないか。参加しても、居場所を見つけられない人が多いのではないか。ぜひ優しく受け止めてほしい。

・地域に参加をしたいという人は多いと思うが、入り口がわからない。自治会の活動には若いうちから取り込んでいかないと、新しい役員もなかなか出てこない。ウェブは見る人もいれば見ない人もいるので、最初は広報紙でこういうものがあるということを出し、その後ウェブで随時追加して出していけばよいのではないか。

・総務省から出された社会生活基本調査の報告によると、５年前と比べて、ボランティアだけではなく、全般的にいろいろな活動が減っている。企業も従業員に働かせるだけでなく、地域に返すといったことを積極的に評価しないと意識は変わっていかない。役所も全職員に、自分の地域で町内活動、ボランティア活動をすることを積極的に推奨して、年に１回報告書を提出すると評価が上がるとか、そういうことを区役所や市役所全体でやれば役所の意識も変わっていくと思うので、真剣に考えていただきたい。

・ボランティアは、決して強制されてやるものではない。肩ひじを張らずに地域の中で声をかけて、一歩を踏み出してみるということは大事なことだと改めて感じた。

・地域活動のヒントは、ボランティアということを意識しないでできることではないか。「今、自分のできることは何？」と聞いて、「声かけぐらいだったらできる」「お庭の掃除だったらできる」「草むしりだったらできる」、そういうところがボランティアの基本だと思う。子どもやお年寄りに声をかけること、地域の中で缶拾いとかごみ拾いをすること、そんなことから仲間をふやしていくことが大事だと思う。

・町内会というのは一つのキーポイントである。一番小さな単位が町内会であるので、魅力ある町内会づくりは今後検討していく必要がある。

・今日のビデオはうまくいっている事例が出てきて大変よかったが、駅前の駐輪のこ

ととか暗い街灯のこと、子どもの安全のことなど皆さんの心配事のもう少し裏の部分に目を向けてもいいのではないか。これだけの議員の先生方と一堂に会して話し合いができる場なのだから、裏の部分を取り上げることも区の方で考えていただきたい。任期の間、中原のエコロジーのパターンをここで示すといったようなことをしてみたい。

・私たちを取り巻く状況は決していい状況ではない。国の様子をテレビを見ていて知っていると思う。だから区役所だけが踏ん張ってもどうしようもないところもあるのではないか。だから、中原でどんな裏の部分があるのか、それを探すのも私たちの仕事だと思う。住みよいまちづくりは、そういうところからきていると思う。

・子どもを交えた活動の風景は、誰が見ても癒される。駅前の大きな画面でビデオを流して、子どもを交えた活動が中原でもあるんだ、と考えたり思わせたりするだけでもいいことだと思う。

・映像によって目で訴える自然体の形が一番しみ込んでいくと思う。

・今年の県の医師会の目玉は、子どもの通学の安全ということになっている。その辺もばらばらにやるのではなく、区役所の方で統一してやった方が効率的だと思う。

平成18年度中原区協働推進事業評価について検討部会報告と主な委員意見

〈竹井部会長からの報告〉

・音楽関係では、この事業に参加している以外の音楽活動をされている方もいるので、そういう方との連携をもっととっていったらよいのではないか。また、音楽は若い人が参加してくれるので、よい事業である、といった意見が部会であった。

・子育て関係の事業については、さらに統合できるものは統合して、息の長い事業にしてほしい、という意見があった。

・これは協働推進事業という名前がついているので、音響設備の整備等、区役所の設備修理に使うのはおかしい、別の予算立てでしてほしい、との意見もあった。

・早目に余る額がわかるならば、それを有効に使うような仕組みも必要ではないか。

・駅前の総合案内盤のように、一度この予算で設置したものは、その後の修繕等々もこの予算の中でやっていかなければいけないというので、固定化してしまうことにもなることから、そういうものはきちんと別の予算に移す仕組みが必要である、との意見もあった。

・よい事業は継続していくのは当然だが、継続の事業の割合が大きくなると、新しい事業がなかなか入りづらくなってしまう。サンセット方式のような形で、３年なら３年、５年なら５年で新しく始めた事業について評価を行い、必要がなければやめる、よい事業はその枠内で続ける、または別の予算として続ける等、整理しながらやっていかないと、固定的な中身になってしまう。来年度に向けて、区民からの提案のやり

方も含めて考えていきたい。

〈委員からの主な意見・提案〉

・中原区の5,500万円は、どういう形で算定されているのか。

→区役所費の予算で、各区一律5,500万円である。徐々に増額をされてきている。（区長）

・毎年増えているのか。

→毎年増えているということではないが、何年かおきには増えている。（区長）

→７、８年前は3,000万円であったものが、財政の危機で2,700万円に減ったが、阿部市長にかわった後、区への分権ということもあり、また行政と区民でやっていく事業を阿部市長は大切にしているので、協働推進事業という名前をつけて5,500万円に増やしている。（竹井部会長）

・お金の配分は区長の判断でどのように使ってもよいのか。

→税金であるので、何にでも使えるということではないが、要綱で決められている協働推進事業費の範囲内で皆さんの意見も伺いながら決定している。（区長）

・予算の金額はどこでどういうふうに決まるのか。

→協働する相手方と所管課がやりとりをして、区役所内で5,500万円の枠の中でバランスを見ながら配分をしていく。その後、予算を所管する財政局、区を所管している総合企画局等と全体的なところでの調整が入る。新しい事業にも目を向けていかなければならず、よい事業は減らしていくこともなかなかできないので、行政としても苦渋の中で決めている。（事務局）

→区民会議委員からの新しい事業提案や区役所内での事業提案を勘案して、最終的には区長の判断で決めていると聞いている。

・緊急対策経費はどういうときに使うのか。

→新年度に入って予算が決まった後に対応しなければならない事業についてお金を振り分けていく。（事務局）

平成19年度中原区協働推進事業計画について主な委員意見

・19年度の協働推進事業の散策コース案内板設置事業は区の事業だが、多摩川施策推進課で、多摩川の歴史の渡し船の跡の表示板を３カ年計画でつくる事業がある。区の事業と本局の事業が別々に安っぽいものをつくってしまわないで、両方で市民との協働事業で立派なものをきちっと時間とお金をかけてつくることはできないか。市の中でもいろいろな事業で縦割りがあり過ぎる。

→予算の仕組みもあり、合わせわざ一本というわけにはなかなかいかない。多摩川施策推進課で今年度どのようなことをするのか情報交換が不十分なので、環境

局とも相談し、よい方法があるか考えさせていただく。（区長）

・市がやるのか区がやるのかわからないが、こういうものをやってもらいたいというものを中原区協働推進事業企画提案書に上げてよいか。

→市への要望は別の形になる。これは区への協働推進事業の企画提案である。（事務局）

・全般的に見て、女性に関してのものが余り出ていない。女性の自立とか女性を助けるとか、女性に関しての要望を女性の立場として考えていただきたい。